

# オーギュスト・コントの政治思想

高 村 忠 成

## 目 次

- 一、はじめに
- 二、「社会再組織論」の理論形成
- 三、「社会再組織論」の理論構造
- 四、むすびにかえて

## 一、はじめに

十八世紀と十九世紀をわかれ、十九世紀後半の西欧の思潮に広範な影響をおよぼした「実証主義」(positivisme)は、一つの哲学的思惟であり、その運動であることは論をまたないが、同時に、その思惟ならびに運動が政治的ないしは、社会的思想としての性格と役割を強くもっているといふこともみのがすことのできない点である。<sup>(1)</sup>

すなわち、「実証主義」は一つの哲学的方法論というよりも、その發生をたづねれば、きわめて政治的、社会的思惟としての性格を強くおびているのである。

なぜならば、「実証主義」の淵源といわれているオーギュスト・コント (Auguste Comte, 1798-1857) の「実証哲学」(Philosophie positive) 自体が、フランス革命後の混乱した政治的、社会的状況の中から誕生し、かつ、その社会を建て直そうという実践的、現実的な性格を持っていたからである。<sup>(2)</sup>

ゆえに、「コントの体系は決して経験的なものではなかった。実証主義は、事実、一つの方法論以上のものであった。すなわち、それは確固とした断言をもった一体系であり、人と世界についての思想であった」<sup>(3)</sup>との指摘も首肯できるであろう。

したがって、本稿では、ひろく「実証主義」とよばれる思潮全体を理解する一助としてまづその源となったコントの「実証哲学」をとりあげ、様々な性格をもつ彼の学説を、主として政治学、なかんずく政治思想の側面から考察しようとするものである。それは、換言すれば、社会再組織論の理論構造を解明することになる。<sup>(4)</sup>

コントは今日では一般的に「社会学」(sociologie)の創始者として著名であるが、その名称そのものは、彼が一八三九年に創造したものであり、それ以前は「社会物理学」(Physique sociale)という名称でよばれていた。<sup>(5)</sup>

その名称が示す通り、コントの特徴は、政治的、社会的現象を取扱うのに物理学と同じように自然科学的方法を用いて行ない、複雑な社会的諸現象の中にも法則を発見しようと試みたところに存在する。

それは、換言すれば、「かれが主として努力したのは、政治の科学的基礎を確保することであった」<sup>(6)</sup>ということができる。

けだし、彼の目的は、法則を発見し、予見することによって、<sup>(7)</sup>将来の社会組織を誤りなく構想することにあつたらである。

現代の政治学およびその思想が、社会学の成立以後、それとの関係性の上からとらえられることが要求されている今日、<sup>(8)</sup>「実証主義」に触れることは意義があるし、なにかんづく、コントにさかのぼり、彼のめざしたものを再び問い直すことはそれなりの意味がみいだせるであろう。<sup>(9)</sup>

本稿では、こうした主旨から、コントの社会再組織論を、主に彼の中心概念である「三段階の法則」(La loi des trois états)の周辺と、思想のにない手としての「学者」(savant)に焦点をあて、それらの性格と役割にふれることにより、その理論構造を説明しようと試みる次第である。<sup>(10)</sup>

(1) 「実証主義」の定義は多義にわたっている。例えば「実証主義とは絶望的なほど様々な意味にとれる言葉であると十九世紀のあるイギリスの歴史家がいつている (R. Flint, *Anti-Theistic Theories*, Edinburgh, 1917, p. 505.)」(D.G. Charlton, *Positivist Thought in France During The Second Empire 1852-1870*, Oxford 1959, p. 5.)との言葉に代表されるほどである。なお Charlton はこの書において「実証主義」の四つの使い方をされている。すなわち、第一に「社会学的実証主義」それは歴史哲学や社会学理論としての実証主義である。第二に、「一般的ではないがコントによつてはじめて宗教的実証主義である。第三に、コントの歴史的、社会学的、宗教的理論をふくむ全思想体系を指す。第四に、もっとも哲学的な意味において社会的、宗教的そしてコント主義のすべての実証主義の基礎としての実証主義という意味である。南原氏はその語を「もっぱら認識と経験の地盤の上に立って、一切の思惟と人間社会生活を築き上げようとする主張である」と定義しているが至言である(南原繁著『政治理論史』三四〇頁)。なお、実証主義の西欧における発展をめぐっては、W.K. Simon, *European Positivism in the Nineteenth Century, An Essay in Intellectual History*, Cornell University Press, New York, 1963. が参考になる。

(2) コントの学説をめぐる評価は様々である。「コントの実証主義は、偉大な哲学だけがもつ特質を備えている。即ち、コントの実証主義は、いわば多面的であり、異った光をあてる度ごとに新たな輝きを発する」(Roger Daval, *Histoire Des Idées En France, Collection Que Sais-je? N° 593*. 串田・中村訳「フランス社会思想史」(白水社)九七頁)。

(3) W.M. Simon, *op. cit.*, p. 4.

(4) コントの文献に関しては、本田喜代治著『コント研究—生涯と学説』の文献(巻末一一〇頁)に詳しい。それ以外にコ

ントの政治思想研究書として、Alengry, *La Sociologie de Comte*, 1910. R. H. Soltan, *French Political Thought in the Nineteenth Century*, 1931, Chapter VIII. Pierre Arnaud, *Politique D'Auguste Comte*, 1965. 等があげられる。

(5) 「社会物理学」という名称は、コント以前にベルギーの統計学者ケトローがすでにつかっていた。又それ以外に、ペーコンの弟子であるホップズもすでに機械論的な解釈を人間的諸関係の社会にも適用できるといふ基本的な考え方をもっていたところから、「十九世紀におけるいわゆる社会物理学を予見していたといえる」。(原田鋼著『近代政治思想史』五六頁、角川書店)。

(9) J. P. Mayer, *Political Thought in France*, 1947. 五十嵐豊作訳『フランスの政治思想—大革命から第四共和政まで』一五三頁。

(7) 「すべて科学というものは、予見を目的とする」(Comte, *Plan des Travaux Scientifiques Nécessaires pour Réorganiser la Société*, 1822. *Système de Politique Positive*, IV, *Impression Anastaltique Culture et Civilisation*, 1965, p. 118. なお邦訳は、『社会再組織に必要な科学的作業のプラン』霧生和夫訳、清水幾太郎責任編集『コント・スペンサー』世界の名著、第三六巻、一二二頁。本稿は原文、邦訳、ともにこの二書を参照にした。)

(8) 例えば、ドイツ、オーストリアのグンプロヴィッツ、オッペンハイマー、ラッツェンホーファーなどの社会学的国家理論、イギリス、アメリカのコール、マッキーヴァ、ラスキの多元的国家論、フランスのオーリウ、デュギー、ダヴィ、ギェルヴィッチなどの流れを今日の政治学はくんでおり、ここから、社会心理学や文化人類学ともむすびついていることは論をまたない。

(9) Isaiah Berlin, *Historical Inevitability*, 1954. 生松敬三訳『歴史の必然性』一六〇—二頁参照。そこでバーリンは一九五三年五月十二日「歴史の必然性」と題する講演でコントをたたえている。又、コントをウェーバーの啓発者としてとらえているのにH・ガース、W・ミルズがいる。山口・犬伏訳『マックス・ウェーバー』一〇六頁参照。

(10) 本稿ではこうした視点からあつかうために主として彼の初期作品『社会再組織に必要な科学的作業のプラン』を中心に考察したことを付言しておく。

## 二、社会再組織論の理論形成

コントが生まれたのは一七九八年、フランスのモンペリエ (Montpellier) である。

その年は、フランス革命の烽火となったバステイーユの襲撃から九年目にあたる。それは、ナポレオンがイギリス海軍の虚をついてエジプト遠征をくだてた年でもある。いづれにせよ、フランス革命の余韻がまださめやらぬ混乱状態の中にコントは産声をあげた。

フランス革命は、人間のために、理性の光に照らされて、民衆の手によって遂行されたものである。それはまさに、「自由・平等・人民主権という合理的な基礎の上に社会と国家をうちたてようとする一つの偉大な試みであった」<sup>(1)</sup>。しかし、その試みは果して成功したであろうか。

一七八八年、いわゆる「貴族の反抗」によって口火をきられたフランス革命は、旧制度を終焉させ、近代市民社会を誕生させたといわれている。

だが、その革命の渦中であつては、容易に変革が進んだわけではない。革命は、原理的には旧制度を否定したとはいえ、現実的には封建制度の残骸を残し、社会は混乱と破壊に喘いでいた。

特に、革命時代から王政復古期(一八一四年—一八三〇年)に至るまでのフランスは動揺を極め、フランスの政治形態は十一回も<sup>(2)</sup>変遷を繰り返して、起草された憲法は実に八回<sup>(3)</sup>に及んでいる。

革命は国王対貴族、貴族対上層ブルジョアジー、そして、ブルジョアジー間の対立・抗争、プロレタリアートの台頭という形をとって進む<sup>(4)</sup>。しかも、対外戦争がこれに加わりフランスは孤立状態にあつた。

相継ぐ暴動と戦乱により経済的状况は破綻をきたし、特に、一八一一年から一二年にかけて勃発した恐慌は、国家

財政を危機におとし入れ、多くの失業者を生んだ。

こうした状況をまのあたりにして、はじめ革命に賛同し、革命を支持した人々も次第に戸惑いを示しはじめた。

果して、革命は人類にとって進歩なのか後退なのか。その俊巡の中から、ある者は更なる革命の必要性をさげび、ある人々は反動的な姿勢をとるようになる。<sup>(5)</sup>

実に、フランス革命は約一五〇年以上を経た今日から振り返ってみると、近代を開いた歴史の転換点として光り輝いているが、当時においては「無政府状態」としかよびようがなかった。コントは、それを「知的無政府状態」(anarchie intellectuelle)<sup>(6)</sup>と名付けている。

「革命は、憲法、社会、価値の体系がひっくり返ることを意味する。一個人は、こんな運動の一部分または一局面しか撃発したり指揮したりできない」と表現されるほどフランス革命は、人間の理性から出発したとはいえ、人間の手には負えない時代や社会の激流となって人々を巻き込んでいったのである。

コントの膨大な哲学体系はこうした革命的状況の中から誕生したものであり、それは、市民社会の危機を乗り越え、社会の再組織を試みる一つの原理をめざしていた。

しかも、それは、単なる原理として終るだけではなくきわめて実践を強調しており、その意味では誕生の当初から政治的色彩の濃いものであった。

さて、およそ哲学とか、思想とかよばれる分野においては、その理説の形成にあたっては、当時の経済的、政治的状況を土台にするとしても、同時代の知的風潮からも強く影響をうけるものである。

ゆえに、コントの学説を論ずるには、次に、その知的淵源にも触れなくてはならない。彼の場合は、サン・シモン (Claude Henri de Rouvroy, comte de Saint-Simon, 1760-1825) と対比させることが最も彼の学説上の特色を浮き彫りにさせることができると思われる。何故ならば、サン・シモンは彼の師であり、十九歳の時から二十六歳まで彼の

直接的つながりがあるからである。ここでは、コントの理論形成を考察するのに必要であると思われる点だけに焦点を絞りサン・シモンに触れてみよう。<sup>(8)</sup>

「社会再組織」ということを提唱したのもサン・シモンである。「破壊したからには再建しなければならぬ。革命には再組織が続かなければならぬ」、「組織すること、これがサン・シモンの目的」<sup>(9)</sup>であった。

サン・シモンは、文字通り、フランス革命とともに生まれ、フランス革命とともに死んだ。サン・シモンが生きた時代は、革命時代からテルミドールの反動を経て、王政復古期の前半に至る時期である。革命によって、一方的利益を独占した上層ブルジョアジーと旧土地貴族の巻き返しが激しく対立していた時でもある。しかも、産業資本家が、まだ未完成の段階ではあったが強力な勢力をもって誕生しつつあった。

サン・シモンの知的活動は、一七七九年アメリカ独立戦争に参加したり、更に、公使としてオランダに赴任したりした後が始まる。

彼が軍人、官吏としての実際的、現実的活動から身を退いて、知的生活に入ったのは、「実際の煽動政治家よりも寧ろ冷静に物を考察する傍観者の地位を持っていたのであった」<sup>(10)</sup>。

その地位から彼が自己の体験と研究によってえたことは、「社会の人為的変革の実現可能性」<sup>(11)</sup>ということである。人間の理性は、確かに、社会変革の理論を生みだした。しかし、それにもかかわらず、破壊的状况が続くのはなぜであろうか。サン・シモンは、社会を、現実的、実証的に研究することによって、社会的諸現象の底流にある法則を発見しようとした。

「諸現象の手も付けられぬ複雑多岐を一つの基本原則に基づくものとして統一される体系で証明しようという大思想が彼にほのぼのと現われて来たのであった」<sup>(12)</sup>とフリードッヒ・ムツクルはその頃のサン・シモンの姿をえがいている。

そして、彼は、社会的混乱の中からわずかではあるが萌芽している「産業」<sup>(13)</sup>に目を向ける。「産業」の基盤をなし  
ているものはないか。サン・シモンはそこに「科学」を見いだす。ゆえに、中世とは違って、近代社会においては、  
「科学」が重要であり、それを社会現象の研究に取入れなくてはならないと彼は認識する。<sup>(14)</sup>

一八〇九年、彼は十八世紀と十九世紀とは、時代的、社会的状況が大きく変容したことを訴えて、「十九世紀科  
学研究序説」(Introduction aux Travaux Scientifiques du XIX<sup>e</sup> siècle, 1808-10)を著し、「人間科学」<sup>(15)</sup>(la science de l'ho-  
mme)の創造を試みる。

こうしてサン・シモンは、社会再組織化には、複雑な諸現象を基本原則に基づいて統一した体系、即ち、「個別科  
学を総合した哲学体系が必要である」と主張するようになるのである。<sup>(16)</sup>

サン・シモンのこのような思想的基盤を考えてみると、様々な見解はあるにせよ、コントの学説が、彼から多大な  
影響を受けていることは否定できないであろう。<sup>(17)</sup>以下、コントに目を転じる。

一八二二年五月、二十四歳の青年コントは、「社会再組織に必要な科学的作業のプラン」(Plan des Travaux Scien-  
tifiques Nécessaires pour Réorganiser la Société, mai 1822)と題した「趣意書」(prospectus)を著わした。それは、ゲ  
ラ刷りでわずか、百部しか刷られず、しかも、ごく限られた親しい人達だけに贈られた。

しかし、その内容は激しい口調で、傲慢とも思える態度で、当時、最高の科学的威信を誇っていたヨーロッパの  
「学者」(savant)たちに向けられている。

無名の、一介の市井の青年にしかすぎないコントのその「趣意書」は当然のことながら当時のパリの知識階級から  
は無視される。

ただ、彼の師であるサン・シモンだけが、「自分の協力者兼友人の一人がこの重要な仕事を引き受けた。これがそ  
の労作であるが、これはダランベールの書いた『アンシクロペディ』<sup>(18)</sup>の序言にも匹敵する」と言って喜んでくれた。

コントのこの「趣意書」は、彼の学説を知る上において極めて重要である。なぜならば、第一に、この短い論文の中にその後の彼の全思想体系の萌芽がみられる、第二に、コント自身もこの「趣意書」を「基礎的論文」(Opuscule fondamentale)とよんで、後年、彼の主要著作の一つとなった「実証政治体系」(Système de Politique Positive, 1851-4)の中に再録したほどである、第三に発刊の時は、喜んでくれたが、サン・シモンとコントは、実に、この内容をめぐって、以後激しく対立するようになり、やがて両者は絶交したといわれるからである。彼が「趣意書」を著わした一八二二年は、一八一五年から三〇年にいたる期間の中間に位置し、フランスの政治的動揺と経済的不安がもっとも大きかった時である。

コントはこの書の中で、まづ目のあたりにした当時のヨーロッパの社会的状況を分析し、次に、「政治学を觀察科学の域にまで高める」<sup>(19)</sup>必要性を説き、最後に、「社会学」<sup>(20)</sup>の実現を構想している。彼がこの書で問いかけたことは人間の理性をこえた法則の発見ということである。

彼はいう。「現在まで人間は、自分の政治的計画が社会秩序を改善する無限の力を持つものと信じてきた」<sup>(21)</sup>。しかし、「一般的に言つて、人間がある影響を及ぼしたように見える時も、それは、その人間自身の力によるものではない。人間の力など、実に極めて微々たるものにすぎない」<sup>(22)</sup>と。

社会や時代は人間ではどうすることもできない法則に従つて動いていることをコントは知る。「人間の力は、その知性にある。知性が觀察によつて、この法則を知る力、その結果を予見する力」<sup>(23)</sup>を人間に与え、人間はその法則にもとづいてきたるべき社会を計画することができるのである。コントのこの主張の中に十八世紀啓蒙思想の超越をみることができる。彼は理性万能を拒否し、理性の手段化を訴え、理性の役割りを限定したのである。

そして、彼が発見した法則を「三段階の法則」<sup>(24)</sup>と名づけ、その法則を基礎にした政治学を彼は実証哲学と後年よぶのである。一八三九年には、この「觀察科学の域にまで高められた」政治学をコントは社会学と命名した。実に、コ

ントの社会学とは彼の思想の出発点に立ちかえってみると、市民社会の危機を乗り越え、新たな社会建設をめざす政治理論であるといえよう。<sup>(25)</sup>

さて、こうしたコントとサン・シモンを比較してみると、もはや類似点は明らかである。それは社会現象、政治現象といえども、一つの法則を持しており、社会を再建するためにはその法則に従わなくてはならないということである。そして、共に目的は、フランスおよびヨーロッパの社会再組織という実践的なものである。

しかし、コントとサン・シモンの理論は、類似したまゝ進んだわけではない。いな、むしろ、生涯二度と同じ道を歩むことがなかったほど決定的対立状態に陥ったのである。

同じ発想的基盤をもっていた二人だけに、その噛み合いは激しかった。

コントとサン・シモンの対立の第一点は、サン・シモンが一八一四年以降、社会変革の方法を変更し、極めて实际的な諸政策に走ったことにある。サン・シモンは、前述したように、社会再組織は統一した観念体系の上に成立すると主張していた。しかし、それにもかかわらず、彼は、急激に現実変革の方法を採るようになる。

その原因としては、一八一四年、ナポレオンに対抗したヨーロッパ列強の軍隊が同盟を結び、フランス領内に侵入し、パリを脅やかす事件があげられる。

この事件を境にフランスは王政復古に入るわけであるが、サン・シモンは、この事件を目撃し、現実の社会に再び目を向けなくてはならないことを痛感する。サン・シモンのこの態度は、社会再組織について、「まづ作業の全体は、せひとも、この第一の系列から始めなければならない」(第一の系列とは理論的作業を指す)<sup>(26)</sup>というコントのそれとは相対立する。第二点は、サンシモンが極度に「産業」(経済現象)を重んじたことにある。コントは確かに、「産業」は重要であるが、それはあくまでも社会現象の一分野にしかすぎず、社会現象の総合的認識、即ち、経験と観察にもとづく全体的認識でなければならぬと強調する。<sup>(27)</sup>

サン・シモンは言う。「政治とは生産の科学であり、換言すれば、あらゆる種類の生産に最も好ましい事態を目的とする科学である」<sup>(28)</sup>、又、「……政治学は、経済学に支えられることになるであろう。或いは寧ろ、経済学が、すべての政治学のうちで唯一の政治学になるであろう」と。そして、彼は、「産業的君主制」<sup>(30)</sup>を主張するにいたる。

これに対して、コントの「すべての種類の社会現象は、その性質上、同時に、しかも相互に影響を与え合いながら展開するために、あらかじめ全体の進行方向をおおむね見定めておかなければ、個々の種類の現象がたどるコースは全く説明がつかない」との主張とは当然あいられない。<sup>(31)</sup>

このように、コントの全体的認識を強調する方向と、サン・シモンの経済的現象を重視する方向とは、全く歯がみあわず二人の間の溝はますます深まっていくのである。

サン・シモンとコントを比較した場合、サン・シモンは、社会再組織について断片的、抽象的にしか明さなかったが、コントは彼の思想を受けつぎ、体系化し、発展させたとい一般的にいわれてきた。<sup>(32)</sup>確かに、コントはサン・シモンを乗り越えて彼なりに自己の思惟を明確にしようと努めたのであろう。コントがサン・シモンとの絶交ののち、サン・シモンの名を殆んどださずに、もっぱら、モンテスキューとか、コンドルセの影響を強調しているのもサン・シモンに勝ろうとするコントの焦りとも思える。ともあれ、コントの理論形成は、このように十八世紀の啓蒙思想を乗り越え、サン・シモンの影響をうけてなされてきたのである。それはなによりもまづ、社会再組織にあたっては、理論を構築することが先決であり、しかも、社会現象を全体的に認識することが第一歩であるとの特徴を有している。

- (1) Albert Soboul, *La Révolution française 1789-1799*, 1951. 小場瀬・渡辺訳『フランス革命(下)』(岩波新書)二一五頁。  
 (2) 主な政治形態の変遷と名称は以下の通り。立憲国民議会(1789, 5-1791, 9)、『立法議会(1791, 10-1792, 9)』シロンド派公会(1792, 9-1793, 6)、『山嶽派公会(1793, 6-1794, 7)』熱月派公会(1794, 7-1795, 10)、『総裁政府(1795, 10-1799, 11)』執政政府(1799, 12-1804, 5)、『ナポレオンの帝政(1804, 5-1814, 4)』第一次王政復古(1814, 5-1815, 3)、『ナポレオン百日天下(1815, 3-1815, 6)』第二次王政復古(1815-1830)。

- (3) 人間および市民の権利の宣言(1789)、『第一次憲法(1791)』、『ジャコバン憲法(未公布1793)』、『フランス共和国憲法(総裁政府1795)』、『フランス共和国憲法(執政政府1799)』、『フランス憲法(立憲君主制、ブルボン家1814)』、『憲法章典(立憲君主制、ブルボン家1814)』、『憲法章典(立憲君主制、オルレアン家1830)』。この点についてはコント自身も、三十年の間に次々と憲法がつくられしかも、二百条にあまる条文が含まれていることに対して「政治における人間精神の恥辱」(Comte, op. cit., p. 61. 霧生訳 六四頁)と憤っている。
- (4) フランス革命関係の考察に関しては、桑原武夫編『フランス革命の研究』(岩波書店)、E・J・ホブズホーム著、安川・水田訳『市民革命と産業革命』(岩波書店)及び前掲のアルベル・ソプール著、小場瀬・渡辺訳『フランス革命、1789-1799』(上)、『(下)』などがすぐれている。
- (4) 代表的なのがド・ボナル(De Bonald, 1754-1840)、『ド・メーストル(De Maistre, 1753-1821)』そしてイギリスのエドマンド・バーク(Edmund Burke, 1729-1797)などである。ところで、実証主義は十七、八世紀の啓蒙主義のゆきすぎに対する反動として一般的にとらえられている(南原繁)。この意味で啓蒙主義を別のかたちで乗り越えようとしたロマン主義と比較される。
- (6) 傍点筆者。コントが社会的混乱をこの名称でよんだ背景には、「世界が諸観念によって支配されまた覆される」ということ、換言すれば、一切の社会機構が究極に於いて輿論を基礎として立つということ、最早や証明の要を見ないことである。『実証哲学講義第一巻』、田辺寿利著『コント実証哲学』六四頁より引用)との指摘がある。
- (7) J.M. Thompson, Robespierre and The French Revolution, 1952. 樋口謙一訳『ロベスピエールとフランス革命』(岩波新書)一九〇頁。
- (8) コントとサン・シモンの関係については、古賀英三郎著『コント社会学の基本構造』(一橋大学一橋学会編『社会学研究1』)一八四―一六頁の(注)が参考になる。もとよりコントの思想形成はサン・シモンだけに由るものではない。コント自身の『社会再組織に必要な科学的作業のプラン』においてもモンテスキュー、コンドルセの影響を強くうけていることが明確である。田辺氏は前掲書において、コントが「一方モンテスキュー、デカルト、ベエルを連らねるフランス合理主義の根本精神、すなわち懐疑的精神を摂取し、他方パスカル、テュルゴ、コンドルセを経てサン・シモンに來たつたところの、フランス的『進歩思想』を採用した……」(五〇頁)と述べている。又、マルクーゼは、コントの哲学が現存の秩序に対して肯定的な(positive)態度をとっている点を指摘し、『ド・メーストルの影響をうけているといっている』(H. Marcuse, Reason And Revolution,

1954. 榊田・中島・向來共訳『理性と革命』三六四頁参照。

- (9) G. Weill, *Saint-Simon et Son oeuvre*. 古賀前掲書一六六頁より引用。
- (10) Friedrich Muckle, *Saint-Simon, sein Leben und Werk*. 高橋正男訳『サン・シモンの生涯と其思想体系』七一八頁。
- (11) 田中治男著『フランス初期社会主義』（日本政治学会年報『西欧世界と社会主義』一九六六年所収）四頁。
- (12) F. Muckle, 前掲書十七頁。
- (13) サン・シモンにおける社会再組織の主体者は産業者である。彼の産業者がなにを意味するかは明確に決められない。ただ、「最も広い意味での生産者であり、その中には工業家、技術者、芸術家、農民、手工業者、労働者、銀行家、商人等がふくまれている」、「かれにおいてはこの産業者の中からやがて資本家と労働者が階級として対立して行くであろうことは明確に意識されていない」。(高橋和之著『フランス憲法学説史研究序説(一)』) 国家学会雑誌第八十五卷所収三九頁。同様の主張は、高島・水田・平田著『社会思想史概論』一八二頁にみられる。だが、この概念も『産業体系論』、『新キリスト教』において、サン・シモンは、産業者を自分の腕の労働以外に何らの生存手段を持たない階級と規定し、だんだんとプロレタリアを意味するようになってくる。(稲上毅著『社会学的「実証主義の構想力」』、思想一九七二年五月号所収、三八頁参照)。
- (14) サン・シモンの処女作『「ジュネーヴ人の手紙」(一八〇三年)。
- (15) これは「一般生理学」、「社会生理学」ともよばれている。
- (16) H. de Saint-Simon, *Mémoire sur La Science de L'homme*. 古賀前掲書一九一頁参照。
- (17) 「僕は確かに知己としてサン・シモンに大いに感謝しなければならない」(本田喜代治著『コント研究』三二頁)とコント自身がみとめている。
- (18) 本田前掲書二九頁。
- (19) 正しくは本稿三を参照。
- (20) コントは一八三九年『実証哲学講義第四卷』において *socius* (ラテン語、仲間、社会) と *logos* (ギリシヤ語) をむすびつけ *sociologie* というフランス語をつくった。
- (21) Comte, *op. cit.*, p. 84. 霧生訳、八七頁。
- (22) *op. cit.*, p. 94. 霧生訳、九七頁。
- (23) *op. cit.*, p. 94. 霧生訳、九七頁。

- (24) この法則をコントは、「私が一八二二年に発見した偉大な哲学的法則 (la grande loi philosophique)」と誇っている。『実証哲学講義第四巻第五一講社会動学の根本的諸法則或は人類の自然的進歩の一般理論』の中に出てくる。
- (25) コントが一八二二年に論文を出して以来、社会学という言葉を一八三九年につくるまで十七年間もかかった歴史的事実がどういえるであらう。
- (26) *op. cit.*, p. 63. ( ) 内の解説は筆者。霧生訳、六六頁。
- (27) コントは経済学が歴史的变化をまぬがれないにもかかわらず、経済学のみが社会全体を左右すること、超時間的存在であることを誇っていることを否定している。この点については、本田喜代治著『コントと経済学』(本田前掲書二八八—三四五頁)参照。コントの社会という概念は、政治、経済、法律、歴史などの全体をふくんだものである。
- (28) H. de Saint-Simon, *L'Industrie, ou Discussions Politiques, Morales, et Philosophiques, dans l'intérêt de Tous les Hommes Livrés à des Travaux Utiles et Indépendants*. Tout par L'industrie, Tout pour Elle. 古賀前掲書一七二頁より引用。
- (29) 古賀前掲書一七二頁。
- (30) この点について詳しくは、H. de Saint-Simon, *Catéchisme Politique des Industriels*, 1824. 参照。
- (31) *op. cit.*, p. 135. 霧生訳、一三八頁。
- (32) 例えば、E. Durkheim, *Le Socialisme*, 1928. (前掲縮上論文五〇頁参照)。なお、E.A. Tiryakian は、「かれは、他のいろいろな計画で頭がいっぱいだったので、かれの設定したこの個別科学の骨組みや方法を系統的に明確化することはほとんどできなかった。それは、かれの弟子でも秘書もつとめたオーギュスト・コントの仕事であった」(Tiryakian, *Sociologism and Existentialism—Two Perspectives on the Individual and Society*, 1st ed. 田中義久訳『個人と社会』一一頁)と述べている。

三、社会再組織論の理論構造

(1) コントの認識過程

コントがめざしたのは、フランス革命とその後続く政治的社会的混乱に対し、「この動揺する状況に終止符をうち、日一日と社会を侵している無政府状態を喰いとめる唯一の方法」<sup>(1)</sup>をみいだすことである。

その方法とは、彼によれば、「危機を単なる精神運動に還元してしまふ方法である」<sup>(2)</sup> (*réduire la crise à un simple mouvement moral*)。なぜならば、コントは「社会的無秩序の原因は、およそ社会や世界に対する人間の意見や概念の無政府的状态にある」と考えていたからである。<sup>(3)</sup>

今までに社会再建の試みが主として二つの側からなされてきた。一つは、いわゆる国王の側からであり、他の一つは人民の側からである。<sup>(4)</sup>しかし、「国王は事実と矛盾しているのに対して、人民は原則と矛盾している」<sup>(5)</sup>。

国王は神学的理論にもとづき封建的、神学的組織を全面的に無条件で復活させようとしているがこれは、完全に誤りである。なぜならば、「この組織の没落は、危機の結果ではなく、危機の原因なのである」<sup>(6)</sup>。

革命は、封建的、神学的組織の中に存在する矛盾から生じたものであり、その組織こそ、今日のフランス社会の解体という危機をもたらした直接の原因なのである。国王はこの事実がつかず、封建的、神学的組織が崩壊したのは革命によるものであると錯覚をしている。

一方、人民は「原則」と矛盾している。なぜならば、人民は社会再組織のための理論において、組織建設の理論と破壊のそれとは全く別でなくてはならないという基本的な条件を無視しているからである。

人民の理論は批判の理論である。それは人民に無制限の信仰の自由を許し、しかも、憲法を何度も改定し、制度の改革ばかりをあせらせている。特に、「人民主権」(La souveraineté du peuple)の原理は誤まっている。コントは、その理由として、たんに人民に権力を賦与しても、人民は時代や文明の動向を知らず、むやみに権力を行使するので社会秩序を脅かす危険性がある。人民に権力を与えるならば、人民に時代や文明に流れる法則を教えてからでなくてはならないという。「封建的・神学的組織を破壊するのに役立つ批判的原理を、そのまま組織の原理として提出すること」<sup>(7)</sup>に人民の大きな誤りがある。

このように国王も人民も社会再組織に失敗している。いな、この両者の必死の試みがかえって、「革命の源泉」になり社会を混乱に陥れているのである。

コントの社会再組織論は、「国王には時代逆行的方向を捨てさせ、人民には批判的方向を捨てさせることができる。ただ一つの理論たる建設的理論を作り上げ……」<sup>(8)</sup>ることにある。

近代自然科学の発達はキリスト教にみられる神話のドクマを暴露し、社会・経済的諸関係の複雑さは形而上学的抽象理論の脆弱性をあらわにする。封建的、神学的政治理論に固執する国王と、形而上学的、革命理論を振りかざす人民に錯覚と誤りを指摘し、法則に則った科学的方法による政治理論をうちたてようとしたのがコントの目的である。

コントは、社会再組織のためには二段階の手続きを採ることを主張する。<sup>(9)</sup>

まづ第一に、理論的・精神的作業である。これは、組織の構想、社会関係の調整を司る新しい原理を指す。第二に、実践的・世俗的作業。実行である。国家とか社会を建設するためには、先づ理念、原理、方向性を明確に定めなくてはならない。次に、それにもとづいて、体制、制度、組織、権力の配分、行政制度などが決められるべきである。

もとよりこうした考え方はコントにはじまるものではない。プラトンの昔からルソーの近代に至るまで、<sup>(10)</sup>すべて制度という現実のあり方と、制度の理念のあり方とを分離して研究する方法は採られてきた。

コントは、理論の改革を先づ行い、次にそれにもとづいて制度の改革を企てるのである。この理論の改革こそ「政治学を觀察科学の域にまで高める」ことであり、「実証哲学」の完成である。

そして彼は、理論の改革作業を続けるにあたって次の様に述べている。<sup>(11)</sup>

第一に、政治から、神学的、形而上学的性格を取除き、科学的性格を与えるために、政治の実証的基礎となるべき「人間精神の全体的發達の歴史的觀察体系 (système d'observations historiques)」を作りあげること。

第二に、その実証的政治学にもとづいて実証教育体系 (système d'éducation positive) を樹立すること。

第三に、人間知性の現段階からみて、自然を人間の利益のために改造すること。社会計画もその目的達成のためになされなければならない。

実に、コントにとっては、「人間精神の全体的發達の歴史的觀察体系」を樹立し、人民にそれを教育し、それをもって社会の目標としては、自然を開拓して産業を發達させることが理想であった。彼の社会組織論もそれをめざして出發するのであり、三段階の法則は全体の基礎ともいふべき、「人間精神の全体的發達の歴史的觀察体系」なのである。

## (2) 三段階の法則

コントの三段階の法則<sup>(12)</sup>は、人間精神の發達過程とみる認識論の側面と哲学的方法論としての側面と両面をかねそなえている。しかもそれは、やがて人間精神だけではなく、それに対応した政治、社会組織のあり方まで説くにいたる。すると、それ全体を含めて三段階の法則と称するようになる。その意味でコントがのべたように、それはまさに文明史論でもある。こうしたことをふまえて三段階の法則に入ろう。

コントが人間の精神は三つの段階を経て發展してきた。即ち、第一に、神学的あるいは虚構の段階 (l'état théologique ou fictif) 第二に、形而上学的あるいは抽象の段階 (l'état métaphysique ou abstrait) 第三に、実証的あるいは科

学の段階 (l'état positif ou scientifique) と、このように見たのは彼の人間精神発達に関する認識面である。

しかし、彼はこれをもって哲学的方法論ともみなし、人間知性のあり方を主張するのである。即ち、人間の知性が神学的精神にもとづくとは、人間が一切の現象を超自然的觀念である神がおこすものと考える段階である。これに対し、形而上学的段階では、自然とか、理性とかに原因を帰着する。

コントは、神学的、形而上学的知性及びそれにもとづいた方法を否定する。なぜならば、それらは全くの想像、空想によるものだからである。

神学的知性は、現象の本質的原因を前面に押しだす。それは批判や検討の余地を許さないから、いわゆる絶対的性格を誇示して、あらゆる進歩を阻止してしまう。形而上学的知性は、極めて批判的であり、なんら新しいものを生まない。なぜならば、それは神にかわったとはいえ、やはり人間の觀念にもとづくものであり、「形而上学とは、実際には、破壊的単純化によって徐々に弱められた一種の神学にすぎない」<sup>(13)</sup>からである。

コントによれば、こうした神学のおよび形而上学的知性は、初期の哲学に特有な、漠然とした身勝手な説明で終っており、人間でいえば幼年期にあたる。

これに対して、実証的知性は、諸現象を観察し、そこにみられた事実を整序し、諸現象を類似と継起の関係でむびつけ、そこに法則を発見しようとする働きをもっている。

ただ彼は、神学のおよび形而上学的知性の働きを全く認めなかったわけではない。神学的知性は、少数のバラバラの観察された事実をたがいむすびつけ、法則を発見する動機になる。形而上学的知性は、神学的から実証的に知性が移行する際の過渡的役割を果す。折衷的性格がその特徴である。<sup>(14)</sup>

実証的段階では、「事実を関連づけるのは、事実自体によって示唆され、確認される全く実証的な種類の一般的觀念や法則などである」<sup>(15)</sup>。

こうしてコントは、人間精神の発達を明かし、人間の知性が実証的にならなければならないことを強調するに至る。それは何よりもコントが分類した諸科学の階統(Hiérarchie des sciences)<sup>(16)</sup>のうち社会学を実証的にするためでもあった。

次に、人間精神と社会組織はコントにおいてどのように関係づけられるのであろうか。三段階の法則はこの社会組織との関係性ではじめて意味を持つ。彼は「社会組織を文明の段階と切り離して考えてはならないこと、社会組織を文明の必然的派生物と考えねばならない」ことを強調している。<sup>(17)</sup>

コントにとって文明とは「一方では、人間精神の発達であり、他方では、その結果としての自然に対する人間の働きかけの発達である。言いかえると、文明の観念を作っている要素は、科学と芸術と産業である」<sup>(18)</sup>。文明を形成する人間精神とその所産である科学、芸術、産業の発展が社会組織を決定するという。

こうした観点から彼の主張に従えば、神学的段階では、科学、産業は進歩しておらず、征服が社会の活動目標であり、社会は軍事制、奴隷制をとっている。形而上学的段階では、すべてが中間的であり、科学と産業は進歩しているがまだ未成熟であり、法制的形態がその特色である。実証的段階になると科学と産業が発達してきて、社会の活動目標は完全に産業になる。

コントはこの段階では、科学と産業が文明における支配的要素になるので、世俗的権力を産業家に、精神的権力を学者に賦与する<sup>(19)</sup>ことを主張する。

このように、人間精神の発達を基軸に、その所産である文明状態と社会組織の関係性についてあかしたコントの三段階の法則の結論は、世俗的権力と精神的権力を分離し、産業家と、学者にそれぞれの権力を賦与した社会組織の構想である。

こうした三段階の法則は、実に、「コントが実証主義の必要を力説する理論的土台となったところのものであるが、また同時にそれは、政治理論の意義をも、持っている」<sup>(20)</sup>。コントが、神とか、自然とかいう概念を人間が勝手につ

くりあげた空想であると否定したことは、自然法思想、社会契約論、自然権、人民主権などの当時の啓蒙的政治理論の一切を排除したことを意味する<sup>(21)</sup>。

そして、この三段階の法則が、来るべき時代を産業と科学の時代であると予測して、産業家と学者にそれぞれ権力を賦与することを主張したことは、それまでの既成の神学的、形而上学的政治理論を否定する進歩性を有しつつも、後になって資本主義を容認するイデオロギーとの批判を受ける要因にもなったのである<sup>(22)</sup>。

実に、三段階の法則は、コントの人間観、歴史観、政治社会観であり、広く文明論でもある。コントにとっては、観察と経験はこの三段階の法則を発見するためのものであり<sup>(23)</sup>、「政治学を観察科学の域にまで高める」とは、この法則を政治学の基礎に置くことを意味している。

### (3) 学者の性格と役割

コントの社会再組織論の中で特異な地位を占めているのが学者である。ここでいう学者とは、彼自身の定義に従えば、「観察科学の専門的教養に生涯をかけていなくても、学問的能力を持ち、実証的知識全体について十分に深い研究を重ねた結果、自分の精神を修練し、自然現象の主要法則に親しむようになった人<sup>(24)</sup>」のことである。

社会再組織論は、神学的理論や形而上学的理論とちがって実証的知識にもとづいた理論でなくてはならない。ゆえにコントによれば、その理論の担い手は「辯舌、つまり説得の才能ではなく、推論、つまり検討と整理の才能<sup>(25)</sup>」が必要とされる。

しかも、「たとえ真に適任で有能な人が、現在の危機を終わらせるはずの正しい建設的理論を作り上げたとしても自分の権威を認めさせる力が伴わなければ意味がない<sup>(26)</sup>」。「この精神的影響力をほしいままにしているのが学者だけだということがすぐにわかる<sup>(27)</sup>」。

コントは理論がいかに精緻を誇っていても、民衆がそれを受け入れなくては無意味であるとの観点から、理論形成を行う人はそれなりの精神的権威をもった学者がよいと主張する。じつに、彼が、精神的権力を学者に与えたのも、社会再組織のための理論が、ひろく民衆の同意をうることができるようにするためである。しかし、彼が権力を二分したのは更に理由がある。それは彼が産業の発達と社会の秩序をいかに調和させるかを考えていた点にある。すなわち、産業が発達すれば当然それに伴って分業が生まれる。分業を阻止することはできないがそれによって人々の間に意識の亀裂がおこるのである。そこから社会が分裂し、やがて対立が生じる原因になる。

そこで、世俗的作業である産業がどんなに細分化し、専門化しても、人々の間に一体化、同質化をもたらす精神的象徴があれば社会の統合は可能である。<sup>(28)</sup>

中世においては、世俗的権力が領主に、精神的権力が法王にそれぞれ分有され、そこで調和がたもたれていた。彼はこうした諸々の事実をふまえて、「実証主義の精神に徹した学者たちが、精神的権力として産業家の活動をコントロールすることによってのみ、新しい社会は有機的社会になることが出来る」と考えたのである。<sup>(29)</sup>

このようにみると、コントの社会再組織論の「再」とは、社会を秩序ある状態へもどすという意味と、かつて秩序のたもたれていた時代、すなわち中世への復帰という意味と、二面性をふくんでいるものであることが理解される。

コントは、更に、社会再組織のための理論的作業を学者の手にゆだねる理由を次のようにまとめている。<sup>(30)</sup>

第一に、学者は、知的能力、知的教養の種類からみて、複雑な社会現象を分析し、理論形成を行うにふさわしい豊富な知的教養をもっている。第二に、学者は組織されるべき組織の中で精神的権力となる。第三に、新しい建設的理論の採用を決定するのに必要な精神的権威を持っている。第四に、あらゆる既存の社会的勢力のうち学者の勢力のみが全ヨーロッパ的規模のものである。

コントの目的とする社会再組織の対象は単にフランスだけではなくヨーロッパをも含んでいることはすでにのべ

た。社会再組織論はヨーロッパのすべての国の人々から承認をうるものでなければならぬ。その意味でも、共通の思想、同一の用語をもち、しかも永続的な活動目的を有する学者だけがこの大偉業に着手できる資格をもっている。

コントはいう。「要するに問題は、ヨーロッパの学者の力を合わせて、実践とははっきり違った実証的理論、知性の現段階に適した新しい社会組織の構想を目的とする理論を政治のために作りあげることにある」<sup>(31)</sup>、「学者は今日、政治を観察科学の域にまで引き上げなければならない」と<sup>(32)</sup>。

このように社会再組織における学者の役割はコントが分離した二つの作業のうちもつとも土台となるべき理論的作業の遂行という面である。

ところで、コントにおける学者の役割と性格という問題は、マンハイム (Karl Mannheim, 1893-1947) におけるインテリゲンチヤのそれとの対比において興味深いものである。

マンハイムにおいて、精神的な活動を行うのは、「あの、はっきりとは錨をおろしていない、相対的に無階級な階層」<sup>(33)</sup>、即ち、「(アルフレッドウェーバーの用語を使えば) 社会的に自由に浮動するインテリゲンチヤである」。

インテリゲンチヤこそ党派を乗り越えて政治学を科学として成立させるための役割をもつたものとしてマンハイムに重んじられたのである。

マンハイムは、知識を有するがゆえに、階級に左右されずに自由に飛翔できる存在であるインテリゲンチヤに、社会の危機を回避する計画社会の構想をゆだねる。コントも同様に、精神的権威、知的能力という点から社会を再組織する理論構築の任務を学者に課している。

しかし、マンハイムの社会計画面案が、階級的、経済的要因を軽視して、インテリゲンチヤに期待を託すという形で論を閉じているために、形而上学的、観念的との批判を受けているように<sup>(34)</sup>、コントが「政治学を観察科学の域にまで高める」ことによって構想した社会再組織論も、社会の精神的権力を学者に賦与するという形で終ってしまっている

ために、同様の指摘を受けている。<sup>(35)</sup>

たしかにコントは文明とか、社会とかいっても厳密にその構造には触れなかったし、<sup>(36)</sup> 全体的認識を強調するあまり、個々の経済現象、政治現象等の関係性については、詳しく論じていない。彼にとっては、三段階の法則さえ発見すればすべての事象はこの法則によってわりきることができるとの確信があったからであろう。この点についてはいみじくもミルがすでに指摘した通りである。「コントは研究の方法という点では常に正確であり深いところも持っているが、証拠の条件ということは正確に規定しようと試みることさえないし、その条件を正當に理解もしていないことは彼の書いたものを読めば明らかなことである」<sup>(37)</sup>と。とにかく実証哲学の完成がコントにとって政治の出発点であったし、そのことを考慮すると、コントにおける学者の役割は、理論的作業の遂行という極めて非政治的性格を持ちながら、組織されるべき社会の中にあつては、政治的象徴としての精神的権力をもった政治的性格の濃い存在としてあらはれているといえよう。

そして、コントのめざした社会計画の実践は、学者が民衆に三段階の法則を基礎にした実証哲学を教育することからはじまる。民衆がそれによって文明の動向を知り、社会の構想について同じ意見をもてば社会の混乱はおこらないと彼は確信したのである。ただその確信がコントを楽観主義にかりたてたのであり、現実を軽視した観念論に陥れたのである。

(1) *op. cit.*, p. 48. 霧生訳、五一頁。

(2) *op. cit.*, p. 48. 霧生訳、五一頁。

(3) 南原前掲書一四六頁。

(4) ここでいう国王とは、「封建的制度の回復を欲する反動的勢力の総称であり、人民と呼ぶものがフランス革命のうちに絶頂に達した進歩的勢力の総称であつて、この中には革命を通じて自覚と自信とに到達したプロレタリアートの勢力も、曖昧な形式の下に含まれているのであろう」(清水幾太郎著『社会学講義』五二頁)との指摘が適切である。なお、人民をもう少し詳

しくいうと『百科全書』に結集した啓蒙的合理主義的思想家の一群」(樺俊雄著『実証主義と社会学』—武田良三博士古稀記念『近代社会と社会学』所収七七頁)ということになるうか。

- (5) op. cit., p. 51. 霧生訳、五五頁。
- (6) op. cit., p. 49. 霧生訳、五三頁。
- (7) op. cit., p. 52. 霧生訳、五五頁。
- (8) op. cit., p. 56. 霧生訳、六〇頁。
- (9) op. cit., p. 63. 霧生訳、六六頁参照。
- (10) この点についてはルソー、『エミール』を参照。
- (11) op. cit., p. 84. 霧生訳、八五頁参照。
- (12) 三段階の法則について、政治学説としての観点から論じたものに今中次磨著『政治学説史』(日本評論社版昭和六年)の第三章「政治発生論史」の中にすぐれた研究がある。特に同書二六二—二八一頁参照。この法則は、「一八二二年に素描されさらに、『実証哲学講義』の第一巻(一八三〇年)や『実証的精神論』(一八四四年)のなかで精緻化され、ついに、彼の社会動学の基本原理となるにいたった」(阿閉吉男著『市民社会の系譜』九〇—九二頁)ものである。なお、この法則は、十八世紀のブルジョアジーの指導理念となった進歩の観念(*idée de progrès*)の影響をうけたものであるがこの点に関する研究はここでは省略する。
- (13) *Discours sur l'esprit positif*, 1844. 霧生訳『実証精神論』一五四頁。
- (14) op. cit., p. 77. 霧生訳、八〇頁参照。
- (15) op. cit., p. 77. 霧生訳、八一頁。
- (16) 彼は諸科学を数学、天文学、物理学、化学、生物学そして社会学(社会物理学)の六段階に分けた。その基準はそれぞれの科学が対象とする現象の単純性(*simplicité*)、あるいはその普遍性(*généralité*)にもとづく。数学がもっとも普遍性をもっており確実であり実証的になるのも早かった。以下それに続くというわけである。そして、彼は、数学から生物学にいたる五個の科学はすでに実証科学として成立しているがただ社会学というもっとも対象が複雑でかつ、人間的事象との関係性が密接な科学だけがまだ実証性を有していないところから自己の使命をこの科学を完全に実証的段階にまで高めるところにおいた。この科学の分類および体系化は一七世紀以後ベーコン、ダランベールなどによって試みられてきたがコントは更にそれを発展

させようとしたのである。

- (17) op. cit., p. 88. 霧生訳、九一頁。
- (18) op. cit., p. 86. 霧生訳、八九頁。
- (19) コントはこの考えをかなり早くからいだいており、「組織されるべき組織の中では、精神的権力は学者の手に、世俗的権力は産業指導者の手に握られることになるう」(op. cit., p. 72. 霧生訳七六頁)とのべている。これが晩年になって宗教にうつかわられるが、ここでは省略する。
- (20) 今中次磨著『政治統制論』(日本評論社、昭和一三年)六八九頁。
- (21) 例えば、コントはルソーを厳しく批判している。ルソーを十八世紀革命的形而上学派の代表とみなし、その理論は、「原罪による人類の必然的墮落についての有名な神学的ドグマの単なる形而上学的変形にすぎない。(中略)このような学説は、著しく進歩的な意図を含んでいにかかわらず、実際には、普遍的退化を统一的に組織しようとしているものではないか」(Cours de philosophie positive, IV, pp. 38-39. 井伊玄太郎著『文明社会学』一五四頁より引用)とのべている。
- (22) コントの実証的(positive)という言葉自体の中にすでに肯定的という意味がふくまれていたとの点から、こうした見方は一般的になってきている。例えばマルクーゼなど。わが国では、清水幾太郎著『社会学批判序説』が代表的なものである。
- (23) 本稿は三段階の法則の批判的研究が目的ではないので詳説は避けるが、ただ彼が科学的であるために必要な経験と観察という方法を提示しておきながら三段階の法則の中においてはそれらがその法則を正当化するための手段と化してしまっていることは指摘できる。例えば彼が経験と観察を重んじるならば、彼の生活における「脳の衛生」(hygiène cérébrale)などという読書停止は彼の科学的態度と明らかに対立するものである。(本田前掲書六七―七〇頁参照)三段階の法則に対する批判はいろいろあるがデュルケイムがこの法則は事実として存在するかどうかは疑問であり、かりにこのような進化が存在していると仮定してもそれは科学の発達をまたねばならないと批判したようなものが一般的である。(宮島喬著『社会学の実証主義の思想構造』思想一九七一年七月号所収三二頁参照)。
- (24) op. cit., p. 72. 霧生訳、七五頁。
- (25) op. cit., p. 70. 霧生訳、七四頁。
- (26) op. cit., p. 78. 霧生訳、七六頁。
- (27) op. cit., p. 73. 霧生訳、七六頁。

- (28) この点に関しては、Cours de Philosophie Positive, IV, pp. 429-431. 参照。(P.S. Cohen, Modern Social Theory, London, p. 28. より引用)。
- (29) 清水幾太郎著『人間を考える』二〇八頁。
- (30) op. cit., p. 76. 霧生訳、七九頁。
- (31) op. cit., p. 77. 霧生訳、八〇頁。
- (32) op. cit., p. 77. 霧生訳、八〇頁。
- (33) K. Mannheim, Ideologie und Utopie, Bonn: Friedrich Cohen, 1929. 鈴木二郎訳『イデオロギーとユートピア』一四六頁。
- (34) K. Mannheim, Man and Society in an Age of Reconstruction. Studies in Modern Social Structure, 1940. 福武直訳『変革期における人間と社会』四七五頁、訳者あとがき「カール・マンハイム人と業績」参照。
- (35) この点に関しては主としてマルクス主義の側から客観的実在についての不可知論として攻撃をうけている。しかし、コントへのこうした方法の論理的な側面からの批判は、John Somerville, Philosophy and Politics Today, 1968. 芝田進午編訳『現代の哲学と政治』二二—三四頁が参考になる。
- (36) 「コントは決して社会を定義しなかった。しかし、コントにとって社会とは家族とか社会諸結社などから成立し、それは結局、諸国家とか人類になるものである。相互に作用する人間精神の総合的結果である文化の概念に近いとも規定できる」(N.S. Timasheff, Sociological Theory, its nature and growth, chapter 2. Auguste Comte, p. 30.) などを参照。
- (37) J.S. Mill, Autobiography of John Stuart Mill. 朱牟田夏雄訳『ミル自伝』一八三頁。

#### 四、むすびにかえて

本稿においては主としてコントの社会再組織論の形成とその主要な点に関する概括を彼の主張にしたがって考察してきた。そこで知られたように彼はなによりもまづ一専門分野の学者にとどまるより、フランス社会の混乱とヨーロッパの秩序破壊に真正面から取り組む研究者であろうとした。コントはあくまでも全体的、一般的を無視して部分的、

特殊な視野にとじ込めることを否定した。社会、文明という全体的展望を彼はなによりも重んじたのである。コントにとって、社会再組織のための課題は科学的政治学の確立であった。三段階の法則の発見でもあった。それを民衆に教育することによって社会の混乱を阻止できると彼はかたく確信したのであり、彼の生涯はそのためのものであったといえよう。

その成果が果して実をむすんだかどうかは疑問である。もちろん満足できうるものではない。ただコント自身、自らの仕事が不完全であることは認識していたのであろうし、専門的な研究に必ず入らねばならないことも十分承知していたこともうかがえる。例えば、ティマシエフは、「彼はイデオロギー的決定論者の一人と考えられてきた。しかし、コントは、人口の増加、ならびにその密度の増加なども理解していた」と<sup>(1)</sup>評価している。

また、コントは、自分のそうした科学的方法や、三段階の法則などについてはあくまでも確信していたにちがいないし、自己の社会再組織の方向も決して誤っていないことを誇っている。それは結局、コントが自己の思想の社会的有意性を信じていたからである。コントの社会再組織論とそれにもとづく新しい社会の展望が科学的正確性を欠いているとの批判や、ブルジョアジーのイデオロギーになったとの批判等は否定しがたいといわなければならないであろう。けれども、そのことによってコントの学問的意義は過少評価されるべきではないし、彼が提出した問題には実に多くの示唆が内包されている。

すなわち、彼が哲学的方法として実証哲学を提唱し、諸現象を説明するのに、空想的、抽象的思惟にもとづくのではなく、経験と観察を駆使して、歴史的、実証的に行なわれなくてはならないと主張したことは哲学における革命であるといえる。しかも、その実証的方法は、社会科学諸部門に大きな影響を与え、特に政治学の分野においては、今日、政治思想もしくはその理論について、没落か復活かをめぐって活発な論争が展開されているが、それはコントの実証哲学およびそれに源を発する実証主義に一因があるといっても過言ではない。<sup>(2)</sup>

また彼の三段階の法則は文字通り、政治学およびその思想の進むべき道を指向していたといえよう。なぜならば、政治学ははじめ、哲学と同義に考えられ神学に従属していた。それは、政治学を宗教的、倫理的価値規範性において求めようとするものである。コントは政治学をまず神学から解放した。次に彼は法学から政治学を切りはなす。フランス革命当時、政治学は法学であった。法律が憲法という形をとって政治のあり方を規定していたからである。コントはこのような状態を形而上学的とよんで否定した。「これらの法学者は、ギリシャの形而上学者の後を受け嗣いだローマの法学者に倣って、一般制度における善と悪との究極の拠り所として、想像上の自然法を認めて居たからである」<sup>(3)</sup>。そして、最後に、彼は政治学の科学性を主張するのである。このように、コントが政治学を神学的段階および形而上学的段階から実証的段階にまで引き上げようとした試みは、現代の政治学が、神学および法学から独立してはじめて一箇の科学として成立した事情を予知するものであったといえないであろうか。

コントは強調する。「現在の危機を終らせることのできる社会再組織が人類が経験してきたあらゆる革命の中で最も徹底的なものである」<sup>(4)</sup>と。「最も徹底した革命」こそ社会再組織である。コントがめざしたのは、社会再組織が単に政治体制の変革、経済組織の改革のみに終るのではなく、社会というあらゆる分野を総体としてとらえた全体的変革であった。そのために彼は、社会的諸関係という横の面の研究から類似の現象を、人間、文明社会という縦の線の研究から継起の現象を、それぞれ抉りだしてその接点に社会学という新たな政治理論を誕生させたのである。こうした彼の理論は、まさに政治学の対象領域を単なる統治構造から社会現象までに拡大し、かつ、政治学に文明という長期的、巨視的な観点を与えたといえる。その際とくに彼が人間精神を固定的にはなく進歩するものととらえ、その人間精神と文明と政治、社会組織をむすぶ法則を発見しようとしたことは、単に経験的、感覺的要素を重んじたイギリスの啓蒙合理主義を更に広く発展させたものといえよう。

元来、政治思想は、政治が社会的状況と深いかわりあいをもち、社会の動向を決定する技術としての性格をもつ

ているのに対して、その政治のあり方を原理的に指導する役割を有している。特に、政治、社会が急激に変化する状況にあればあるほど、科学としての政治学の成立がのぞまれるし、確固たる政治原理としての政治思想は要求されるものである。こうした意味から、コントの学説が十八世紀から十九世紀にかけての古典的理論であるとはいえ、流動する社会現象の本質に迫り、政治、社会学の科学的研究を確立しようとしたことは意義がある。

もちろんコントの学説には多くの疑問点が残されている。しかし、時代の巨大な問題に取組んだ彼の意欲と情熱を高く買うとともに、今後、コントのめざした先駆的業績を正しく評価し、それを更に展開しなければならぬであろう。

(1) Timasheff, *op. cit.*, p. 30.

(2) D. Germino, *Beyond Ideology. The Revival of Political Theory*, 1967. 奈良和重訳『甦える政治理論』七五—一三八頁。等最近の研究が参考になる。

(3) 津久井龍雄『コントの実証哲学』（事業之日本社版大正十五年）二四—五頁。なお政治と法との関係性については、「政治は法秩序と関係してはいるけれども、法秩序そのものではなく、むしろ法秩序を作り出す法的判断の過程に関連して、見出されるものである。しかし、そのことは法の理念と政治とを同一視することではなく、むしろ政治的動向が、法理念を決定するものと考えねばならない」（今中次磨著『政治統制論』一四九頁）が示唆的である。

(4) *op. cit.*, p. 97. 霧生訳、一〇二頁。